



吉川市立東中学校 学校だより

あじさい

<https://www.yoshikawa.ed.jp/higashi-jh>

令和7年10月号

全校生徒数 290名

〒342-0017

住所：吉川市上笹塚 3-104-1

TEL：048-982-0244



今の自分を成長させるために ～女子やり投げ選手「北口榛花選手」から学ぶこと～

校長 伊東 猛

ようやく朝夕には涼しい風が吹き、少しずつですが秋の気配が感じられるようになりました。2学期も本格的に動き出し、行事や学習に取り組む姿から、皆さんの成長を日々感じています。特に今学期は、仲間と共に高めあいながら取り組む機会が続きます。先日行われた新人戦でもたくさんの成長を感じることができました。

さて、9月13日から21日まで「東京2025世界陸上」が行われました。そこで私が最も注目していた選手は、パリオリンピックで女子の陸上フィールド種目「やり投げ」の金メダリストとなった北口榛花選手です。それは、彼女のこれまでの努力や苦勞が幾度となくTVや雑誌等で紹介され、そのたびに人としてのすばらしさに感銘を受けてきたからです。その報道から、「今の自分を受け入れて、その中でやれることを積み重ねる」北口選手の柔軟さや強さを感じることができました。

北口選手は幼少期に水泳を習っていたそうですが、当時のコーチは「体は大きかったけれど、とびぬけて早い選手ではなかった。全体で練習しても周りの子についていけない。でも本当に練習を休まなかった。泳ぎ始めると絶対に負けないといったところを前面に押し出してくる子でした。いつもゴーグルに涙をためながら泳いでいました」と言っていました。彼女の「あきらめない気持ち」が伝わるエピソードです。

その後はバドミントンを始め優秀な成績を取めますが、当時通っていた高校の陸上部顧問の先生から誘いを受けてやり投げに転向します。高校1年生でやり投げを始め、高校2年生ではインターハイで優勝するほどになっていましたが、大学進学後はコーチ不在やケガ、フォームの不調などで思うように記録が伸びず、長い期間苦しんでいたそうです。そのスランプを打破するため、北口選手は単身でやり投げ大国のチェコに出向き、まったく知り合いがいない状況の中で自らコーチを探し、教えを請うために慣れないチェコ語で何度もメッセージを送り、苦勞に苦勞を重ねてやっとの思いで新しい練習環境を作ったそうです。北口選手は「あの時は本当に崖っぷちでした。自分だけではどうしようもできないとわかっていたからできたことだと思います。」と当時を思い返しながら言っています。

その努力が記録向上につながり、2021年の東京オリンピックに参加しますが、脇腹痛に悩まされ結果は12位となり、その後はまたスランプに陥ります。そんなときでも自分をあきらめず「できることを一つずつやろう」と気持ちを切り替え、トレーニングを続けたそうです。その結果、2024年の東京オリンピックでは日本人として初めての投てき種目で金メダルを獲得することができました。

そして大きな期待を背負った今回の世界選手権では、肘のケガ等もあり、残念ながら予選敗退となってしまいました。そんな悔しい状況の中で北口選手は、試合後のインタビューで「とりあえずいったん休んで、もう自分の頭が肘のことを考えないでできる、すべての練習ができるっていうことが一番大事だと思います(略)ここで決勝残れなかったからって、人生終わりだという風には思わないので、ちょっと長い休みは必要かもしれないですけど、強くなってちゃんと戻ってきたいと思います。」と結果を振り返り、今後のことに目を向けて語っていました。

生徒の皆さんも、部活や習い事、日ごろの生活の中で、努力した成果が出なくて焦ってしまうことや、壁にぶつかってしまうこともあるかもしれません。けれども、その時大切なのは「今の自分」をしっかり受け止め、その中で最善を尽くすことだと思います。その積み重ねがやがて自信となり未来への成果として結びついていきます。

秋は実りの秋といえます。北口選手のように現状を受け入れる強さと柔軟さをもって自分の可能性を広げてほしいと願っています。